超・極低出生体重児に対する ＮＩＣＵ退院後早期からの介入の試み

（分担研究２　乳児期（Toddler age）の介入システムの確立とその効果）

研究協力者：中農浩子[1)]
共同研究者：藤村正哲[1)]　山崎不二子[1)]　大賀聡子[1)]　横浦葉子[1)]　藤江のどか[1)]　樫本文子[1)]
稲垣友里[1)]　岡本伸彦[1)]　折井由美子[1)]　山口和子[1)]　山本悦代[1)]　西尾春恵[2)]
前田多英子[2)]　金澤忠博[3)]　鎌田次郎[4)]

【要約】大阪府立母子保健総合医療センターでは、ＮＩＣＵ退院児に対して、従来から就学まで発達外来を行うと共に、センター保健婦の関与により、地域と連携しながらのフォローアップを実施してきた。今回このシステムに加えて、最も育児不安の大きい、退院後から約１年間、親子のグループを構成し、親の育児不安の軽減による、より良い母子関係の確立、児への発達援助を目的に介入を行なった。その方法と効果、問題点について考察を加えた。対象が、超及び極低出生体重児で在宅酸素使用中の児を含め、ハイリスク児であること、介入の開始が、退院後約１ヵ月からと早期であること、スタッフが多職種から構成されたことなどが特色である。

【見出し語】超低出生体重児　早期介入　乳児期　育児不安　親子のグループ　母子関係

【はじめに】

近年、新生児医療の進歩により、超及び極低出生体重児の救命率は著しく高くなった。それに伴い、児の発達上の問題や養育上に起こる問題が指摘されるようになってきた。特に、超或いは極低出生体重児の場合、親の戸惑い、心理的な葛藤、予後の不安の大きさは深刻であり、まず親の育児不安ができるだけ早期に軽減され、児との関係が深まるような援助が必要となってきている。医療でカバーされていた入院から自宅でのケアに移る退院後では、その直後の１ヵ月前後がもっとも育児不安が強く、育児や成長の不安の高さも少なくとも１才位までは続くと考えらえる。当センターでは就学まで、新生児科、小児神経科、眼科、心理、保健婦による発達外来を行なっている他、退院前にはセンター保健婦が面談し、地域の保健所につなぎ、退院１ヵ月前後で地域保健婦の家庭訪問が行なわれている。今回、より良い援助として、このシステムに加えて、育児不安の高い１年間に親子のグループによる介入を試みた。

【対象と方法】

介入群、コントロール群は出生体重1500g未満で参加を希望した親子の内、訓練、療育の予定がないもの、各８組（最終各６組）。介入群はグループ開始時在宅酸素使用４人。グループの参加開始は退院後日数平均36日（16日~67日）であった。期間は１年間（4月~翌年3月）月１回、第１土曜日の午前中。前半期10:00~11:30、後半期10:00~12:00。場所はセンターで行なった。スタッフは、医師（ミニレクチュアのみ）、看護婦、保母、保健婦、ＭＳＷ、ＯＴ、心理である。プログラムは年間、行事を除いて、ミニレクチュアと親の話し合い、ＯＴのワンポイントアドバイスは定例とし、後半期は保母による親子の遊びの時間を延長し心理のワンポイントアドバイスを適宜加えた。ミニレクチュアは、特に、小さく生まれた子どもの成長発達、対応の仕方の理解に重点を置いた。テーマは表１に示す。この他に、出産や入院中の気持ち等を綴った自己紹介冊子を作成しメンバーと共有した。又、毎月家での様子と、グループでの児の様子を書いて母とスタッフでやりとりする連絡ノートと、前回のミニレクチュアの要約や家での遊びの紹介等を載せた“わくわく・通信”を発行してきた。又、家で利用してもらう教材として米国の早期介入のモデルとして使われた、Sparlingの“Early partners”を日本語版に翻訳して、毎回簡単な説明をした上で手渡してきた。

【結果】

出席率は２月までの10回で、平均は88％（父親は32％）であった。退院直後からの時期で、在宅酸素も含め、身体的にもリスクが高いことや、市外からの参加といった条件からすると高率と考えられた。

効果の評価は現在も継続中である。アンケートからその一部を紹介する。退院直後から１ヵ月前後（介入前）と健診時（介入後。介入群の２名は修正10ヵ月、それ以外は修正４ヵ月時点）に実施した２回のアンケートから、子ども（表２）と母親自身に関する評価（表３）の縦断的変化を、介入群と非介入群で、各項目の５段階評価の平均値で比較した。非介入群で回答が得られた例数が少なかったので統計的意味とはならないが、この結果では、子どもに関する評価の変化では、非介入群が、健康や、発達、性格・行動への不安の評価が２回目もまだ高い水準にあったのに対して、介入群では、これらの不安の軽減がみられた。また、母親自身に関する評価の変化では、介入群は非介入群に比べて、より多くの項目でポジティブな評価がなされるようになった。特に介入後は「この子を可愛いと思う」ことが多くなり、「この子とはピタッとくる感じ」をより強くもてるようになっている。一方、非介入群は、育児に対する心配や不安が相変わらず高く、「育児が嫌」だったり、育児から解放されたい気持ちをより強く抱いていることがみられた。

グループ終了前に実施した参加メンバーへのアンケートでは、グループの開始時期としてはメンバーから適当との評価を得た。希望の参加時期としては、退院後１ヵ月位からというのが平均で、その他は直後からと、１～２ヵ月後からの希望があった。

Early intervention for very low- birth- weight infants after discharge from NICU.

1)大阪府立母子保健総合医療センター　2)堺市立あけぼの療育センター　3)大阪大学　4)関西女子短期大学
1)Osaka Mdical Center and Research institute for Medical and Child Health　2)Sakai City Rehabilitation Center for Handicapped Children　3)Osaka Univercity　4)Kansai women's College

参加動機は同じ立場の親同志の交流とスタッフの話を聞いて少しでも不安を少なくできたら、という不安の解消と親同志の交流が求められていた
参加して、大変満足、自分自身と子どもの両方にとってよかったという意見が多かった。よかったことについては、①同じ立場で悩みを話しあえて安心できた、少しでも不安が解消できた、精神的にリラックスできた、ストレスも発散できた、等不安の解消に役だったことが挙げられたことと②育児のアドバイスをもらえて、レクチュアで知識が増え、子どもの対応の仕方が学べたこと、スタッフにみてもらえていて心強かったこと、等知識、情報の獲得、共有という面での意見が多くを占めた。その他には、他の子が成長していくのをみるのがとても楽しみだった、小さなことでも相談できたこと、自分の体のことを心配してもらって嬉しかったこと、スタッフに会えるのが嬉しかったなど、会の雰囲気の受容性とも関係することが挙げられた。また会の継続が望まれた。

【問題点】

一方参加メンバーのうち２名が会から離脱となった１人は参加１回だけで、翌月離婚。１人は広義のＳＩＤＳとなった。

【考察】

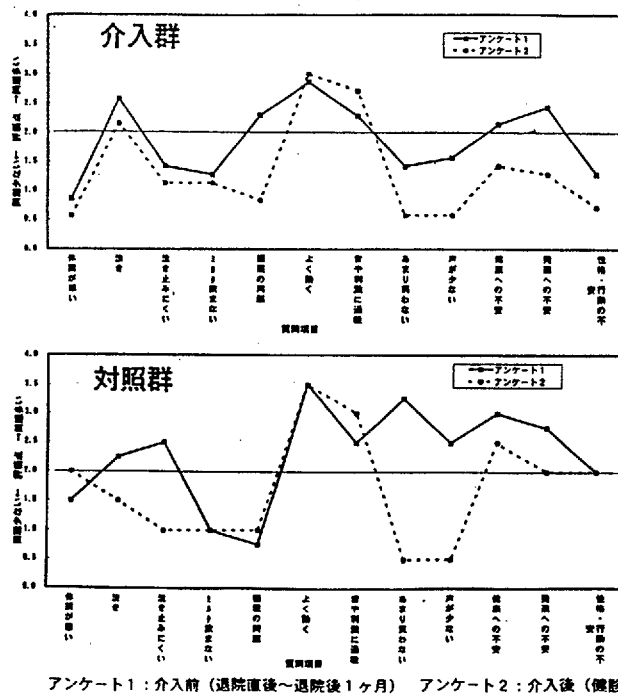
社会的ハイリスク乳幼児の援助として、親の社会的孤立を無くすことや親に子どもの発達の知識を増やすことが有効と言われている。ハイリスク乳幼児をもつ親にもそれに共通するような、緊迫した状況に置かれることがみられる。我々の今回の試みの効果についての客観的な評価は継続中であるが、同じ立場の親同志が集えることで孤立感が減少し、低出生体重児の予後の予測がついたり、児の反応の意味や具体的な関わり方がわかることで児の理解が進み、その結果親の不安が軽減され、児への感情がよりポジティブな方向へ変化する効果が見られたのではないかと考えられた。また参加メンバーから継続の希望も多く、退院早期からの介入の必要性が強調された。

一方、ハイリスク児とその家族への早期の介入には身体面及び家族へのきめ細かな配慮を要することが認識された。離婚のケースではＮＩＣＵ入院中、特にスタッフが気掛かりなこともなく予測が全く出来なかった。参加も１回だけで状況の把握が十分出来なかった。退院という状況は新たな家族機能の形成や調整の時期で、ハイリスクの児とその家族にとっては非常にリスキーな時期であること、又、退院前から退院後家族が安定するまで、きめ細かな配慮をした流れを作ることの難しさが再認識された。今回の離婚で子どもは直接の原因とはなっていないが、子どもは在宅酸素中で、食事も食べさせにくく母には育児の負担感があったのではないかと考えられた。ＮＩＣＵ入院中からの児及び家族の状態の評価と初期からのアタッチメント形成に向けての介入や心理的援助、ＮＩＣＵから外来へ継続して関与できるスタッフが中心にいること等が重要になる。特に、リスクの高い家族の場合、本音が出せる場や相手が必要で、グループだけでなく個別対応や地域との密な連携など、サポートの緻密性、多様性が求められる。どの様な介入が適切であるかの判断が重要であると考えられた。

運営に関しては多職種スタッフの各々の特性が生かせた。特に、前半期では看護婦が、後半では保母の参画は不可欠であった。又、ＯＴワンポイントアドバイスは具体的で判りやすく家族に好評であった。しかし、ボランティアの立場での継続には困難が伴い今後の課題として残った。

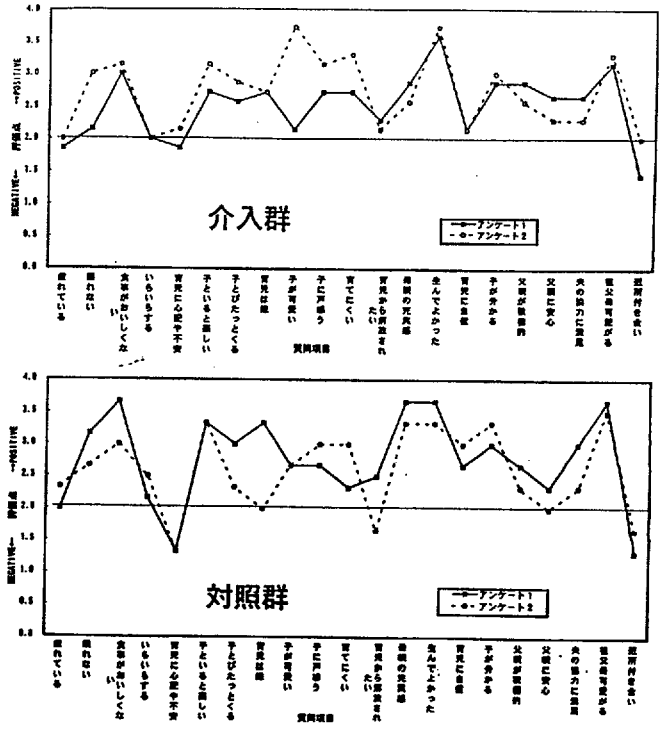
4月	低出生体重児の成長と発達について－学齢期検診から	10月	離乳食のすすめ方
5月	小さく生まれた赤ちゃんとのかかわり方	11月	生活リズムについて
	抱っこの仕方のデモンストレーション	12月	－クリスマス会－
6月	家庭内で起こりやすい事故について	1月	冬場の病気と過ごし方
7月	小さく生まれた赤ちゃんの成長、発育、病気の話	2月	先輩ママの話を聞く
8月	－夏休み－	3月	－お別れ会－
9月	小さく生まれた赤ちゃんの発達について		

表2 子どもの様子に関する評価の変化



アンケート１：介入前（退院直後～退院後１ヶ月）　アンケート２：介入後（健診時）

表3 母親自身に関する評価の変化



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

【要約】大阪府立母子保健総合医療セシターでは、NICU 退院児に対して、従来から就学まで発達外来を行うと共に、センター保健婦の関与により、地域と連携しながらのフォローアップを、実施してきた。今回このシステムに加えて、最も育児不安の大きい、退院後から約１年間、親子のグループを構成し、親の育児不安の軽減による、より良い母子関係の確立、児への発達援助を目的に介入を行なった。その方法と効果、問題点について考察を加えた。対象が、超及び極低出生体重児で在宅酸素使用中の児を含め、ハイリスク児であること、介入の開始が、退院後約１か月からと早期であること、スタッフが多職種から構成されたことなどが特色である。